

---

探して

USER

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

探して

### 【Zコード】

N9122M

### 【作者名】

USER

### 【あらすじ】

リカちゃん人形、あのかわいらしい人形のパーツが消えた。パーツを一日間でさがさなければ自分のパーツが・・・

## 探して

Y市に住む秋さんは、T中学校に通う中学三年生の女の子だ。彼女はショートヘアの似合う子で、男子だけでなく女子からも人気が高い、そんな彼女はある時忽然と姿を消したのだった。警察は必死になつて秋さんを探した。だが一ヶ月たつても秋さんが見つかる事はなかつた。

秋さんが消えてから三ヶ月目、彼女の友達であつた絵美さんは、警察にこんな事を言つた。

「秋は、リカちゃん人形に殺されたんです。」  
誰も信じなかつた。それも当然だとおもう。中学三年生の言つ事なんか誰も信じてくれるはずがない。絵美さんはそう思つていた。でも言わなければ気が済まなかつた。

なのに、どうしてだろう? 真実を話してから、誰もいないはずの空間に気配を感じる、絵美さんは次第に真実を語つたことを後悔し始めた。

夏休みを四日後にひかえた七月十八日、絵美の中学校は短縮日課に入り、授業は三限目までの四十五分になつていた。  
今は、すべての授業が終わり、掃除の時間だつた。絵美の掃除場所はトイレだつた。

「ああもう! めんどくさい!!」

トイレに声が響く。その声は絵美と同じ班の香澄のものだ。  
「どうして明後日大掃除があるつて言つのに、今日も掃除をしなきゃいけないの!」

ガンガンとティックラッシュをタイル張りの壁に叩きつける香澄を見ながら、絵美は、

「本当ね、しかも明日は長時間このトイレの中にいなくちゃいけないなんて、考えるだけで気が萎えるよね」

「ホントツやつてらんないよね〜」

そんなたわいもない会話を一度、二度と続けていると、掃除の終了を知らせるチャイムが鳴った。

「帰ろつか

「うん」

二人はお互にを見、そして頷いた。

ちなみに班構成は男子三人、女子三人の六人だが、絵美にいる女子は二人だけなのだ。なぜ一人足らないのかと云うと、その一人があの秋だからだ。

教室に戻った二人は帰りのHRが始まるまでに席に着くと、香澄が秋の席を見て、少し低い声で言った。

「秋、どこいつちゃつたんだろう・・・」

「つ・・・」

「どうしたの？」

「えっ！いや、なんでもないよ・・・」

「なんでもなくないでしょ？顔色悪いし」

「・・・」

「もしかして秋の事で、なにか悩んでるの？」

「そんなこと・・・」

「ないよ、とは言えなかつた。実際、秋のことで悩んでいるのは確かに、友だちに嘘をつくことを絵美はすぐ嫌いだつた。

話してしまおうか・・・警察は信じてくれなかつた。なら友達なら？こんな事を自分一人で背負うのは苦しい、ならもう一人真実を知る人をつくろう。仲間を増やそつ。

絵美の後悔はいつの間にか消えていた。絵美の後悔は一体なんだつたのだろう？それは絵美にも分からなかつた。ただ一つ言えるのは、今の絵美には、眞実を言おうという決意だけだつた。

「ねえ香澄」

「なに？」

「聞いてくれる？」

「相談？よし、いいよつードンといー！」

香澄さんは自分の胸を握り拳でたたいた。

「ありがとう・・・実はね」

絵美は香澄の目をまっすぐ見る。一人の間に一時の沈黙が訪れた。

「私、秋がどうして居なくなつたのか知つてゐる」

「えつ！！」

沈黙が消えた。

「落ち着いて聞いてね」

「う、うん」

「信じてくれるか分からぬけど、簡単に言つと、秋は・・・」

「・・・」

「リカちゃん人形に殺されたの」

「えつ・・・」

香澄はポカンと口を開けて、一秒間固まつた。

「ちょっと待つて、それどういう意味？リカちゃん人形つて、あのリカちゃん人形のこと？」

「そうだよ、おもちゃ屋さんとかで売つてる、あのリカちゃん人形

「そんな、冗談でしょ？」

香澄は、心底信じられないという顔をして絵美を見た。だが絵美の顔に嘘という字はなく、かわりにあるのはマジの顔だつた。

「秋は、どうして殺されたの？その・・・リカちゃん人形に」

「それはね・・・」

「ほらー！席付け！HRはじめるぞー！」

絵美の言葉を遮るように、クラスの担任が太い大声を上げて、教室に入ってきた。

絵美は担任を少し睨みつけ、すぐ顔を香澄に戻すと、ささやくように、

「また後で話すよ」

「うん、わかった。」

そう言って、二人は前を向くのだった。

「「 もようならー 」」

教室に何でこんなこと言わなきやいけないんだよ、というような声が響いた後、絵美と香澄は教室を出た。そして、階段を駆け降り、昇降口で上靴と外靴をはきかえ、ダッシュで校門を出た二人は、そこで足を止めた。

「そ、それで、話の続きを聞かせて、くれるんでしょ？」

息を切らせながら、香澄は言葉をつなげる。絵美も息を切らせていたが、すぐに落ち着き、歩を進めながら口を開いた。

「そうね、あれは忘れもしない三ヶ月前の火曜日。私はいつもように学校生活をしていたわ。本当に普通の日常だった。今思えば、あんなに日常を欲したことはなかつたかもしれない。私はいつもより元気のない秋に気づき、声をかけたの、最初の秋は顔をうつむけたままで、明らかにおかしかつた。私は秋に何があつたのか聞いたの、そしたら秋はリカちゃん人形が来た、って言つたの、私は意味が分からなかつたわ、そして秋はこんなことを言つたの。」

夢の中で、リカちゃん人形を持った女の子に会つた。その子の持っているリカちゃん人形はすごく不気味だつた。両腕両足、それと髪の毛がない薄汚れたりカちゃん人形だつた。女の子はそのリカちゃん人形を私に無理矢理持たせると、「この子の両足と両腕、それと髪の毛を探して。」って言つたの、そしてこう続けるの、「もしこの子のパンツを見つけられなかつたら、アナタからそのパンツを貰うわ、右腕がなかつたら右腕を貰う、左足がなかつたら左足を貰う、髪の毛がなかつたらアナタの頭ごと貰うわ。期限は三日、この子のパンツはアナタの学校のどこかにある、それじゃあ頑張つてね。」  
「これが秋の言つたことよ、しかも秋はそのリカちゃん人形を本当に持つっていたの、さすがにあんな物を見せられたら信じるしかない、そして頼まれたわ、一緒にリカちゃん人形のパンツを探してほしい

つて。」

「一緒に探したの？」

「当然よ、毎日放課後に学校中探し回ったわ、期限が一日しかないし、私と秋は、もう必死だつた。でもね・・・」

絵美の頬に一筋の涙が流れていた。

今、秋はいない。つまりこの現実が表すことは一つ

「・・・見つからなかつたんだね」

「・・・」

絵美は黙つて涙をこらえようとするが、瞳からこぼれる大きな雨粒は止まなかつた。

絵美の涙は自分の無力さに、そして香澄もただ自分の無力さをか噛みしめながら絵美の頬から落ちる雨を、眺めることしかできなかつた。

「『めん、ウチも気づいてあげれたら・・・』

「そんな！香澄のせいじゃないよ！それにもう秋は居ないし・・・」

「そう・・・だね」

香澄は小さく頷いた。

空にはまだ地上を照りつける太陽があつた。

その日の深夜、絵美のところに彼女がやつてきていた。

ボロボロな服に乱れた髪、見開かれた目、傷だらけの唇を歪めた不気味な少女、そしてその子の持つている四肢のないリカちゃん人形が・・・

「この子の両腕と両足、髪の毛を探して、もし見つけられなかつたら、見つけられなかつた部分をアナタから貰う、期限は一日、それじゃ頑張つてね」

「ちょっと待つて！どうして！どうしてまたアナタは出でくるの！」

「フフフ、あのパートは腐つたから捨てたわ。だから新しいのが欲しいの、理由はそれだけよ

不気味な少女はそういうて、ビニから持つてきたのか、大きなビニール袋を絵美に差し出した。

絵美はその袋を受け取ると、結ばれた袋の口をゆっくりと解き始める。

「う、ん……」

キツく結ばれているのか、思つように解けない。

「ん・・・開いた・・・」

やつとの思いで袋を開け、その中を恐る恐る覗くとしたところで、絵美の動きは止まつた。

袋の中から漂う嫌な臭いに絵美は顔をしかめる、その臭いは明らかに死臭だつた。

絵美は息を止めて、袋の中を覗く・・・

「・・・うおえ！――」

絵美は袋を余所に投げ口を押されて、腹から上つてくる吐き氣を必死にこらえる。

投げられた袋からは、バラバラにされた秋の体が覗いている、それは丸い球のような物だが、明らかに違うところがある。球に乱れた髪はない。球に恐怖で開いた目はない。

それはズタズタに裂かれ遊ばれたような、秋の首だつた。

「・・・あ・・・・・きい・・・・」

絵美の頬に涙が滴る。

秋を助けてあげられなかつた自分の無力さに、再び涙が溢れてくる。無惨な姿の秋はもう何も言わない、絵美のせいじゃないよと励ましてはくれない。

そして、絵美に頑張れと応援してはくれないのだ。

「ンフフ、その子アナタの友達だつたんだ。かわいそうにね、でもね、その子が私のリカちゃんのパーツを見つけなかつたのが悪いのよ。」

「なに言つてるの――秋はアナタに殺されたんじゃない――そんなにそのボロくて汚い人形のパーツが欲しいなら自分で探せばいいじ

やない！……」

少女の、まるで秋をバカにしたような言ひように、絵美は吐き氣も忘れ人形を下に叩きつけて怒鳴った。

すると少女は、下に放られたり力ちゃん人形を拾い上げ、髪の毛のない頭を絵美の頬になすりつけながら、

「アンタ、いい度胸してるのね。なんなら今すぐアナタの体をバラにして遊んであげようか？」

「い、嫌よそんなの！！アンタなんかに殺されてたまるか！！」

「そうでしょ？ 嫌よね死ぬのは・・・だつたらパー<sup>ツ</sup>の探しやいいんだ！！言つておくけどね、これは交渉じゃないよ！命令だ！Y<sub>E</sub>S以外の答えはいらないんだよ！！わかつたか！？」

少女はそう大声を上げて、リカちゃん人形を絵美の胸に押しつける、絵美はその汚くボロボロの人形を仕方なく受け取り、蚊の鳴いたような小さな声で、

「ちきしおう・・・」

「それじゃあ、頑張つてね。期限は一日だよ。キヤハハハハハハ！！！」

不気味な少女は、高笑いをしながら踵を返すと、そのまま闇の中へと姿を、消していった。

後に残つたのは、哀れな少女と、その少女が握りしめる人形だけだった。

七月十九日

ピピピピピピピピーピー！

「はつ！！！」

絵美は目覚まし時計の電子音で目を覚まし、勢いよく飛び起きた。

そして・・・・

「やつぱり・・・・

自分の右手に握られているリカちゃん人形を見つけた。

「夢じやなかつた・・・・」

絵美はその現実に改めて実感が沸きはじめ、その実感がやがて恐怖へと移り変わり体が震え始めた。

「私・・・殺される・・・」

秋と同じように、体をバラバラにされ、足りないパートを人形にくつつけられて遊ばれる、最後には腐つて捨てられ、また新たな犠牲者が生まれてしまう。

そんなの嫌だ、と絵美は心中呟く。

「探さなきや！腐らない本物のパートを！！」

絵美の仇をとるため、自分が殺されないため、そしてもうこれ以上犠牲者を出さない為。

絵美は決意する。あの少女の思いどおりにはさせないと。

AM八時

部活のない絵美は、同じく部活がない香澄と一緒にで教室にいた。外ではまだ、部活が活動していて、特に野球部の喧騒が騒がしく聞こえる。

絵美と香澄は声を小さくして会話を広げていた。話題はもちろん、リカちゃん人形のことだ。

「ということなんだけど、お願ひ！協力して！！」

絵美は小さい声でそういうて、顔の前で手を合わせた。

「そんな・・・嘘でしょ？」

香澄はまだ信じきれないのか、確認をするように言いつ。

「・・・」

絵美はその反応を予想していたのか、無言でバックの中をあさり、そして四肢と髪の毛のない人形を取り出す。

その人形を見た香澄は、声がないようだ。口を開けたまま、まばたきもしないでリカちゃん人形を見つめている。

「信じてくれた？」

「・・・それ、本当なの？」

「これを見てもそんなこといつの？」

「そうね、そんな趣味の悪い人形を絵美が持っている訳ないもんね。」

・

香澄は腕を組み、何かを考えるような動作をしたあと、無理矢理自分が納得させたように頷いて、

「わかった、協力する！」

「本当！ありがとう！…」

絵美は香澄の手を取り握手を交わす。

「でも、一人じゃ無理よね」

握手から解放された手を顎にあて、香澄は真面目な聲音で呟いた。絵美も同じように顎に手をあてる。

「確かにね、私と秋の二人で探した時は見つからなかつたわ、それならもつと人數を増やすしか…」

「でも、誰も信じてくれないでしきうね…。ウチは絵美から秋の話を聞いてたから、信用できたけど…」

「そうね…。正直いってこのクラスに団結力ないもんね…。私がなにを言つても、誰も信じてくれないわね」

「だったらこうすれば？明日は大掃除でしょ、そのとき、ついでに探してもらうの、理由は無くしてしまつたから、みたいな感じでいいと思うけど。」

「それいい！じゃあそういうことにして探してもらおう…。それなら、ついでならいいか、みたいな感じになるし、興味がある人なら結構真剣に探してくれるかもしねー！」

「よし！じゃあさつそく今日から知らせにいこう！もしかしたら今日も見つかるかもしねー！」

「そうね！よーし！なんだかいけそうな気がする！頑張ろう香澄！」

「そうね！絵美！」

「私たちで！」

「「秋の仇を取る！…」」

まだ誰もいない教室に、いきのいい一人の少女の声がこだました。

それから絵美と香澄の二人は最初の授業が始まる前に、三年生だけでも知らせておこうと、手分けして行動した。

そして、一時限目の授業の終わりにある休み時間で一年生に知らせ、掃除の始まる前の休み時間に、一年生に知らせた。

とりあえず、すべての学年とクラスにパーツを探してほしいということを知らせた二人は、掃除場所であるトイレに集合した。

「一応全部のクラスに教えておいたけど、探してくれるかな。」

デッキブラシを両手で持ち、床を擦る絵美が、そんなことを呟いた。

「デッキブラシで床を擦る香澄が、なに今更弱気なこと言つてんの？大丈夫よ、この学校の生徒は、ざつと八百人、そんな大人數で探すんだもん、たつたの五パーツくらいすぐ見つかるつて！」

「そりか？ それならいいんだけど・・・」

「元気だしなよ！ ほら、ウチらはこのトイレを探してみようよ、もしかしたら、あるかもしねりないよ！」

「うん、そうだね、今更弱気になつても意味ないよね！ よし探そう！――」

絵美は両手で拳を作り、その手を掲げる。香澄は二コ二コ笑顔でそんな絵美の姿を眺めていた。

トイレを探すことになつた一人だが、所詮トイレに隠せる場所なんて限られてる、一人はとりあえず、考えられる所すべてを探した。便器の中に「ミ箱の中、掃除用具入れ、さらには鏡の後ろも見ようと、鏡をズラそうとするが動かないから撤退。とにかくトイレの隅々まで探した。しかし・・・

「ないね・・・」

香澄が呟く。

そう、探したが結局見つかることは無かつた。

掃除の時間は十分間、一人は時間も迫ってきたし、とりあえず探す

のは放課後にして、教室に帰ることになり、二人は渋々教室へと戻る。

その帰り道

「あつ！ そこの君！」

「え？」

絵美は後ろから誰かに肩を捕まれ止められた。

振り返ると、そこには三年生の男子が立っていて、その男子の右手には、なにやら長い物体が握られている。

「君、大事な人形のパーツを探してゐて子だよね？」

「あつ！ はい！」

絵美の心にとてつもないほど希望が輝く。

「もしかして、これのことかな？」

男子はそう言って、右手を開き絵美に見せる。そこにあつたのは薄汚れた人形の腕、リカちゃんの腕だった。

絵美はそれを見た瞬間、涙が出てきそなほど、うれしさがこみ上った。

「はい！ ！ それです！ ありがとうございます！」

自分でも一体どれほど大きな声を上げたのか分からないほど、絵美の心はそのパートにとらわれていた。

「よかつたね、でもどうしてあんな所にあつたんだろうね？」

「これ、どこにあつたんですか？」

「それがね、理科室の人体模型が持っていたんだ。」

「そんな所に・・・」

「まあ、よかつたね見つかって、残りのパーツも見つかるといいね」

「はい！ ！ 本当にありがとうございます！」

「うん、じゃあ俺はこれで」

そういうつて男子生徒は階段をのぼつていった。

その男子から受け取った腕は、右腕だった。絵美は、その右腕を人形の右腕部分に近づけていく、そしてカポンッという音とともに、

「はまつた。」

「やつたね絵美！－あと四つだよ！」

「うん！！！」

二人はその場で抱き合い喜んだ。

その日の放課後、二人は学校中を駆け回り残りのパートを探した。が、結局その日見つかったのは、右腕一本だけであった。

翌日

いよいよ夏休みを明日に控え、また、期限の日である七月二十日、絵美と香澄の二人は、朝からパート探しを行っていた。

今のところ見つかっているパートは右腕一本のみ、残り時間は二時間をきつていた。

二人は一手に分かれ、搜索を行っているが、やはりどちらも収穫がない。

そして、時は進み大掃除の時間。

二人からしたら、これが最後の頼みの綱ということになる。

「みつかって・・・お願ひ！」

絵美はトイレの中で呟いた。

「そうね・・・もし大掃除の時間に見つからないと、かなり危なくなる・・・」

「死にたくない・・・」

「ちょっと、物騒なこと言わないでよ、大丈夫！絵美は死なない、いえ死なせない！」

「ありがとう・・・かす・・・」

まったくの突然、絵美の体から、血が舞つた。

「え・・・？」

香澄も状況が理解できならしく、宙を舞う血に目を奪われている。ビチャッ！と血が床を染める。

「なに・・・が・・・ゴホエ・・・」

「もう、飽きちゃった。香澄さんだけ？アナタも面倒だらから

死になよ。」

「ゲエオ！！」

突如、人形が絵美の手から飛び、頭から香澄の喉を貫く。床に倒れた香澄はビクッ！ビクッ！と体をふるわせている。

—なんて・・・

かすれた声で絵美が言う。

すると、一瞬前まではその場に居なかつたあの少女が、その一瞬で現れていた。

「まだ・・・時間じゃ」

綾美は右の手首から先が無く、左手は呻を轉く聲がれている。  
「あきたの、つまらない。だからもうアナタのパートを貰うわ。ね  
?リカちゃん」

「そんな・・・ユニークー・・・ユニークー」

おふくろは喜んでおなかへ抱かれていた。

「リカちゃん、ほら、あそこのパーティ、探つていいよ。」

「一・二・三・四・五・六・七・八・九・十・」

ハイハイ  
ハーツ

リカちゃん人形のパンツはそろつた。だがそのパンツはいつか腐る。  
そしたら次は・・・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9122m/>

---

探して

2010年10月10日23時20分発行